

システム分析、現象学、そして活動理論 Systems Analysis, Phenomenology, and Activity Theory

小坂 武(東京理科大学)

Takeshi Kosaka (Tokyo University of Science)

要 旨：組織内の既存の多様な実践とそれを担っている人々の知識を有効活用することが今日の企業においてはとりわけ重要である。しかし主流のシステム分析方法は特定の一つの視点にもとづいたシステム要求を産出することに熱心で、多様な実践や知識を照らし出すことはない。認識論としての現象学は社会的現実が構成される構造と条件を解明する態度と方法である。本研究は、現象学が本来のシステム分析の目的と方法に概念的に整合していることを確認し、システム分析の学理とすることが可能であることを議論する。さらに、活動理論を取り上げ、本来のシステム分析を具現化する開発基盤として可能性を有することを議論する。

Abstract: It is important for a company to effectively use a variety of the existing practices and knowledge of the employees. However, dominant systems analysis (SA) is industrious in deriving systems requirements from a specific perspective, not shedding light on them. Phenomenology is an attitude and method that elucidates the structure and conditions with which social realities are being constituted. We will examine that phenomenology is conceptually consistent with an alternative SA we are interested in, and discuss that phenomenology can be considered a fundamental theory for the alternative SA methodology. Assuming Activity Theory (AT) as a candidate of the development base for the alternative SA, we will also discuss AT has a potentiality that materializes the alternative SA methodology.

1. 問題意識

ビジネス・プロフェッショナル (BP) やワーカがシステム開発を主体的に行う必要性を Truex ら (1999) が Communications of the ACM で主張してから 10 年が経過した。その間、Alter (2002) らが BP 用のシステム分析 (SA) 方法論を提唱し開発してきた。

BP 用に必要とされるシステム分析方法の役割と機能を、Kosaka (2008, 2009a, 2009b) は複雑性の理論を経営学に適用した Stacey ら (2000) の理論、変革への抵抗 (RTC) に関する研究 (例えば Coch et al. (1948))、職務充実の研究 (例えば Hackman et al. (1975)) 等によって検証した。それによると、企業が IT を有効活用するには次のような役割と機能が BP 用システム分析 (以下、新 SA) に求められることが指摘されている。

- ・ Stacey らの理論から、BP の参画、対話的行為 (による相互了解)、継続の開発
- ・ RTC 研究から、参画は全員の参画であること、集合的視点
- ・ 職務充実の研究から、一人称視点 (1PP)、行為から活動への視点の移動

本研究は BP のための SA 方法論によって立つ学理を探求する。SA 方法論は経験にもとづいて実践的に構築されてきているが、ここでは確たる学理に基づいた新 SA 方法論を目指すために、現象学にその学理を、活動理論に方法のベースを求めることが可能かを議論する。

2. 先行研究

既存の SA 方法論、例えばユースケース分析は匿名のロールを用いることで、組織の働きを表現している。しかし、経営組織は多様な声がある社会的現実である。

匿名の視点は現実を捉えているとは言えない。それらは客観科学や実証主義に基盤を措いているとみなすことができる。

Alter (2002) や Whitaker (2007) らは、新 SA 方法論を提唱している。彼らは学理ではなく主としてコンサルティングの経験から方法論を着想している。Alter はオブジェクト思考の継承概念をベースに方法論を展開している。Whitaker は一人称視点 (1PP) の概念を SA に導入する必要性を経験のみならず現象学からも着想した先駆的研究であるが、システム分析者を依然として専門家が行うこととしている。これらはいずれも彼らのビジネス上の経験に基づく方法をコンピュータ・サイエンスや現象学で説明・補強したものといえよう。

先駆的な新 SA 方法論として考えられるものに、SSM がある。開発者のチェックランドも現象学との関係に言及している (1985, p. 305) が、必ずしも現象学に基づいたものではなく独自の発想で開発したものである。

以上から、新 SA 方法論の学理を改めて探求する価値があると考えられる。

SA は知を創造する科学に属する。システム設計は有用物を構築する工学に属する。SA は、多様な意見が存在する社会的現実においも、一つの具体的システムを構築するために最終的には一つの論理的システム像を創り出す。成果物のみをみると、それは匿名のニーズにもとづくシステム像で、客観科学を実践したかのように見える。しかし、SA の知識創造は社会的現実を対象とするため、本来、人間科学の領域にある。

人間科学の領域で確たる学問のベースを構築しようとするものに現象学がある。精神科学、人間科学を探究してきたフッサールという (フッサール, 1995, p. 49)。「世界は、学問以前には、すなわち日常的、感性的な

経験においては、主観に相対的なものとして与えられている。・・・われわれは多くの世界があると思っているわけではない。我々は、同じものでありながら、ただ我々にとって異なる現れ方をしているに過ぎない事物で満たされている同じ世界の存在を、必然的に信じている。」（以下、フッサールの言説1）

これは組織や社会で多様な中にも協調して生きていこうとする人間の可能性を捉える視点を現す。

現象学は客観的な学問の可能性を原理的に支配する根本概念や根本命題を解明するものだから、客観的な学問が始まるところで終わりに至る（フッサール, 1997, p. 90）。これらは、新 SA を構想する学理として現象学が検討するに値することを示唆する。なお、現象学への深い関わりの始まりは、我々が一人称視点（1PP）の方法を考察中に、現象学の超越論的主観の考えに遭遇したことによる（小坂, 2009）。

3. 認識問題

ここでは、既存 SA、新 SA、SA 不在の違いを、哲学上の真理問題の観点から理解するために、現象学が寄せる認識問題を考察し、その問題との関係を探る。

フッサールがその生涯を一貫して企てていたのは、論理主義と心理主義の間に途を見出すということであった（メルロ＝ポンティ, 1966, p. 17）。論理主義は、心理的・社会的な因果の連鎖の彼方に、すなわち、外に真理の領域があるということを認める立場である（同, p. 16）。心理主義と社会学主義は、我々の思想は全てある社会状況の表現であって、この社会的状況に限界がある以上、その思想も真なるものではありえないということを力説し、懐疑主義に陥っていた（同, p. 16）。フッサールが哲学者としての仕事に着手しようとしたのは、ここに確実性を再興し、真と偽との区別を復権しようとしたからである（同, p. 16）。

現象学者の関心は、出来上がった世界を目指すことでもなければ、その世界において外的に意図されていた行為を目指すことでもない（フッサール, 1995, p. 323）。我々（哲学者）が感心を持たなければならないのは、与えられ方、現れ方、内在的な妥当様式（確信様式）というようなことである（同, p. 262）。現象学は世界があらかじめ与えられているその普遍的な与えられ方を問う学である（同, p. 263）。

この現象学が確立しようとする世界は、懐疑主義の世界・心理主義の世界でもなく、物自体を認めはするが不可知とする論理主義の世界でもなく、それらの間に強い世界観の世界があるという構成の世界である。フッサールの直観はニーチェの客観世界などは存在しないという考え方を、さらに推し進めた（竹田, 2004, p. 62）。現象学的世界とは、先行しているはずのある存在の顕在化ではなくて存在の創設であり、哲学とは、先行しているはずのある真理の反映ではなくて、芸術とおなじくある真理の実現だとする（メルロ＝ポンティ, 1967, p. 23）。哲学者はさらに、その主観性がその隠

された内的な方法性において世界を所有し、世界を成立させ、形成しつつけているその仕方へと立ち帰る（フッサール, 1995, p. 323）。

以上の世界のあり方を要約すると、心理主義の世界、論理主義の世界（外に物自体がある）、強い世界観が優勢な構成の世界、現象学の世界の4つとなる。

一方、SAにかかわる分析や情報システム（IS）開発形態には、SAを行わずIS構築する形態、SAを行わずベスト・プラクティスを導入する形態、既存SAを実践する形態、新SAを実践する形態の4つがある。世界と開発形態の対応関係は次のようになる。

- ・心理主義の世界 - 無SAでIS構築
- ・論理主義の世界 - 無SAでベスト・プラクティス導入
- ・構成の世界 - 既存SA実践
- ・現象学の世界 - 新SA実践

無SAでIS構築とは自己のやり方を無条件に信奉している心理主義の世界にある。無SAでベスト・プラクティス導入は外に真があるとする客観世界。既存SA実践は主流派の考えあるいは機能的思考で構成する世界。新SA実践は多様さを認めながらハーバーマスのいう対話的理性のもと構成する世界である。

これらの対応関係の存在から、新SAの学理を現象学に求められる可能性がここでまず指摘できる。人々が構成している構造や条件が相互に理解されれば、人々の間で対話的理性が実現する可能性が高まる。

4. 認識様式

「認識は、それがどのように形成されていようと、一個の心的体験であり、したがって認識する主観の認識である。しかも認識には認識される客観が対立しているのである。ではいったいどのようにして認識は認識された客観と認識自身の一致を確かめうるのだろうか？ 認識はどのようにして自己を超えて、その客観に確実に的中しうるのだろうか？」（Husserl, 1999, p. 17; 翻訳は立松による）

主観と客観に関して、世界は神のみがしる物自体の世界と人間が経験を通じて知るかぎりの現象の世界に分けられるとカントはいう。そこから主観と客観の一致はもはや問題とされなくなった。現象学はこれをさらに推し進め、客観・外在の事象は、意識作用の中で内在にそれが構成され、それを通じて客観・外在の事象を私たち人間は理解しているとする（フッサール, 1984, pp. 141-147; フッサール, 1970, p. 19）。

存在は、知り尽くすることができないものとして超越と呼ばれる（Husserl, 2002, p. 134）。超越を我々は内在に構成して理解する。例えば、いま超越としてコップがある。人はそれを上から見たとき円なる現出を、横から見たとき長方形なる現出を感覚・体験し、それから筒なる現出物を知覚・経験する。さらに斜めから眺めると開いている口なる現出を感覚・体験し、確信像としてコップなる現出物を知覚・経験する。

人間はもろもろの現出（射映）から現出物（全体）を構成する根源的な認識様式を有する。すなわち、射映－全体という構図のもとに、人間は世界を確実なものとしてとらえる「内在－超越」の構図が認識の基本構図となっている。これをフッサールは、ノエシス－ノエマ構造（コギタチオ－コギタートゥム）として、「主観的現出様式の多様の中で、その事物は、同一的なものとして、ノエマ的に構成されうるのである」（フッサール, 1984, p. 272）という。ノエマ的なものは統一の領野であり、ノエシス的なものは「構成する」働きをしている多様の領野なのである。（同, p. 150）。意識とは志向体験である（同, p. 255）。現象学の合い言葉のようにいわれる「事象そのものへ」は、この志向体験へ戻り内在に確信像をみずから構成せよと指示する。

経営の場でこれを解釈すると、経営者が部下から、ある種の問題が現場に「ある」あるいは「ない」と報告を受ける。その存在・超越を信ずることもあるが、優れた経営者はしばしば MBWA（現場遊弋管理）や三現主義を実践している。それは現象学が教える、構成的主観、すなわちノエシス的契機をいう。いいかえれば「事象そのものへ」への契機をみずから作りだし、現場で多様な現出を感覚・体験し、自らの主観で現出物を知覚・経験し、経営者自身の中で経営の問題について自ら確信像を作り出す行為にあたる。

次に、構成的主観、あるいは超越論的主観と呼ばれる領野と新 SA との関係について議論する。構成的主観を発揮するとは、他者の言説を事象としてそのまま鵜呑みにするのではなく、みずから構成を行うことを意味する。それは SA を専門家が行うのではなく、三現主義と同様に BP 自らが SA を行うことに通じる。メルロ・ポンティは参加の重要性を次のように指摘する。「参加それ自体を光景として現出させなければならず、・・・世界への我々の実際の参加こそがまさに了解され概念にまでもたらされなければならぬ当のものである・・・」（メルロ＝ポンティ, 1967, p. 14）。

内在に構成されるものはあくまでも内在のものであって、超越ではない。そのため、理解に終わりはない。つまり、社会的現実をよりよく理解しようとするには継続的な行為が必要である。それは、SA が一時の行為ではなく、BP の仕事として継続的なものであることを意味する。また、とりわけ、経営の場は環境が静的でないため、継続は一層重要となる

スペースの関係で略述するが、現象学の基本的な発想では、自然主義的な見方は人格主義的な見方に従属する（フッサール, 2009, p. 14）。これは認識のベースに生活世界がありその中である種のモノやコトが問題となることをいう。これは因果ではなく、動機付けでものごとをとらえる発想である。すなわち、SA において、生活世界である業務・ワークシステムを捨象して IS は考察できないことを意味する。さらに、現象学では間主観性を重視するが、それは組織の中に異なる世界観を有する人々を前提にする新 SA の考えに通じる。

伝統的に、SA は組織にある対立する世界観に対峙し

なければならないが、それを避けてきた。新 SA はそれを避けられない。新 SA の基本的な態度は前出の「フッサールの言説 1」に整合的である。すなわち、人々の確信の構造と条件を明らかにすることから共感が生まれ、ハーバーマスという対話的理性を実践する世界の可能性を描いている。

5. 方法での整合

新 SA は現象学と認識問題および認識様式の両面で共通性があることが判明した。次に、方法の側面でも共通の側面があるかを議論する。現象学は方法でもある（フッサール, 1997, p. 37）。その主要内容は、超越論的還元、エポケー、形相的還元の 3 つである。

超越論的還元とは、人が自然的、いや自然主義的態度にあるのを、超越論的主観に引き戻すことをいう。経営でいえば、三現主義を実践している場をすることをいう。すなわち、モノやコトを前にして意識が働き、内在を構成する場（超越論的主観）に戻ることをいう。

超越論的還元は、「環境や外的諸条件によってわれわれのうちに作り上げられた先入見を露呈してくれるような反省によって、この〈負わされた条件付け〉を〈意識された条件づけ〉に変えようと務める」（メルロ＝ポンティ, 1966, p. 17）ことを行うためにある。私たちの認識のなりたちの条件や構造を暴露することにある。

フッサールは、超越論的還元を行うために、まずエポケー（判断保留）することを求める。「われわれは徹頭徹尾世界と関係していればこそ、我々がこのことに気付く唯一の方法は、このように世界と関係する運動を中止することであり、あるいはこの運動との我々の共犯関係を拒否することであり、あるいはまた、この運動を作用の外に置くことである。」（メルロ＝ポンティ, 1967, p. 12）。経営の場で言えば、部下からの報告をそのまま鵜呑みするのではなく、またそれを否定するのもなく、現場に行くまで、一時保留するというのである。

エポケーの必要性は木田の次の指摘で理解される。

「自然科学的世界像に先立ってすでに常識の枠内においてさえも、存在者の全体は『すべては合理性によって支配されている』という理念のものにとらえられている。この理念がいかに強くわれわれを縛っているかは、例えば、そこにおいて存在者が直接経験され、我々の自身の経験が行われている空間や時間を数学的自然科学によって精密に測られうる即自的な空間・時間であるとみる想定、存在者の因果的連関は科学の精密な因果法則によってとらえうるという想定などが、我々の常識においては自明とされていることからもうかがえよう。」（木田, 1970, p. 60）

ある具体的な体験から出発して、空想的な自由変更を通して、その形相（本質）を抽出する作業を形相的還元という。事実の確認だけでは本質をとらえることには不十分であって、そのためには、さらに「イデア化的虚構」をおこなわなくてはならない（メルロ＝

ポンティ, 1966, p. 61)。この事実から本質への移行が必要なのは「我々の実存はあまりにもびったりと世界の中に取り込まれてしまっているため、世界の中に投げ込まれているそのときにはそうになっている自分を認識することができず、したがって、我々の実存は自分の事実性を認識し克服するためにはまず理念性(本質性)の領野を必要とする」(メルロ=ポンティ, 1967, p. 14)ことによる。この形相的還元によって、変わらぬ構造や条件を見いだすことができ、多様な対立の中で、共感できる条件や構造を探る基盤を与える。

新 SA との関係について、超越論的還元は、1 PP および参画に相当する。エポケーは、自分が信じていることを再検討するために、一時期、先入見を保留する必要性を指摘する。言われていることを単に信じることを一時さしおく必要がある。

形相的還元は、新 SA では明示的に指摘されておらなかった。しかし、多様な人々が関与する社会的現実の中で、協調できる条件を見いだすうえで欠かすことのできない方法であることを現象学は新 SA に教える。

6. 新システム分析と活動理論

新 SA が現象学の枠内に入るものであることが上記の議論で明らかにされ、現象学にその学理を求められる可能性が示された。しかし、それはこれら二つの間に不整合が存在しないことを保証したものではない。それが本研究の主要な限界である。一方、SA の学理を現象学に求めたことで、形相的還元相当の役割が新 SA に明示化されていなかったことが明らかとなった。

最後に、スペースの関係で簡単ではあるが、活動理論との関係に言及する。現象学は新 SA の学理として相応しいと考えられる方法と態度であるが、方法に具体性はない。我々がそれを開発しなければならない。我々は自ら開発する前に、先人の努力の中に関連するものを見出すことができるのではないかと考える。

人はなぜ働くのかを捉えようとした理論に活動理論がある。それは Vygotsky (1978) に端を発し、エンゲストローム(1999)らによって開花した方法論である。ここでは、現象学による SA 方法論を具体化するベースとして、活動理論が有望な候補であることを指摘する。活動理論は図的表現を有し、そこに明示的に主体を取り上げる。これは 1 PP 視点を有することを意味する。対象である客体は、現象学では超越であるが、その手前に広がる人工物なる概念が AT にはある。同じ客体であっても、地と図のなかで、ものは歴史的にある種の道具として沈殿してきた。単に、主体が客体に対峙する構図ではなく、超越論の主観が生活世界を再構成する機会を活動理論は図上に提供する。形相的還元に関して、活動理論は人がなぜ働くかを協働ルールと分配の概念を明示化することで理解できるようにする図的表現を有する。協働ルールや分配を自由に変更することを通じて、可変のものと不変のものを導出する形相的還元の機会を与える。さらに共同体と主体を図上に

表現し、集合的視点を明示的に表現している。また、視点をルーティンとしての所為から、意識した行為、さらには集団の中での活動内へと、自らの位置を地と図で思考できる図的表現方法を与える。これら図的表現は他者と議論を起こし、対話的理性を促進する。なお、継続的開発や全員参加は、新 SA そのものを日常業務の中に組み込むことで可能となり、活動理論そのものに求めるものではないことを付け加える。

主要な参考文献

- Alter, Steven, "The Work System Method for Understanding Information Systems and Information System Research," *Proceedings of AMCIS*, 2002, pp.2372-2380.
- チェックランド, P. 著, 高原康彦他監訳『新しいシステムアプローチ』オーム社、1985.
- エンゲストローム Y. 『拡張による学習』新曜社、1999.
- フッサール, E. 『イデー I-II』みすず書房、1984.
- フッサール, E. 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、1995.
- フッサール, E. 『現象学の理念』作品社、1997.
- Husserl, E., *The Idea of Phenomenology*, Kluwer, 1999.
- Husserl, E., *Ideas*, Routledge, 2002.
- フッサール, E. 『イデー II-II』みすず書房、2009.
- 木田元 『現象学』岩波書店、1970.
- Kosaka, T., "Systems Analysts in Chaordic Organizations," *Proceedings of MCIS*, 2008.
- Kosaka, T., "Basis of Systems Analysis Methods for Business Professionals," *Proceedings of IADIS International Conference on Information Systems*, 2009a.
- Kosaka, T., "Theoretical Investigation into Systems Analysis," *Proceedings of PACIS*, 2009b.
- 小坂 武「一人称視点とシステム分析」経営情報学会 2009 年秋期全国研究発表大会予稿集、2009.
- メルロ=ポンティ、M. 『知覚の現象学 1』みすず書房、1967.
- メルロ=ポンティ、M. 『眼と精神』みすず書房、1966.
- Stacey, Ralph D. et al., *Complexity and Management*, Routledge, 2000.
- 竹田青嗣『現象学は<思考の原理>である』筑摩書房、2004.
- Truex, D. P. et al., "Growing Systems in Emergent Organizations," *Communications of the ACM*, Vol. 42, No. 8, 1999, pp.117-123.
- Vygotsky, L. S., *Mind in Society*, Harvard University Press, 1978.
- Whitaker, R., "Applying Phenomenology and Hermeneutics in IS Design," *Informing Science*, 2007, pp.63-96.